学びや タイムスリップ

由来もきちんと伝わる

京都の小学校には古くから伝わる掛け軸や屏風などの美術品が残っています。校舎落成記念に描かれたものや、出身の画家が母校のために贈ったものなどが長い歴史の中で集まり、一大コレクションを築いているのです。

さまざまな時代の作品が見られますが、中には明治時代よりも前の時代に描かれたものも存在します。右京区の御室小には、江戸時代、1751（宝暦元）年に描かれた「虎図」（写真1）が所蔵されています。

描いたのは高田敬輔という画家で、近江日野に生まれ京狩野の流派に学んだ人物です。

さて、御室校が開校したのは1872（明治5）年のことです。では、なぜ小学校が創設されるよりも前の時代のものが所蔵されていたのでしょうか。実は、学校と江戸絵画を結んだのは御室の名刹「仁和寺」の存在でした。73（同6）年、御室校は児童数の増加に際して新たな校舎を必要としていました。その時仁和寺の支院であった皆明寺がその建物を寄付し、御室校は仁和寺の東に移転したのです。

虎図の筆者である高田敬輔は仁和寺との関係がとても深い人物でした。そのようなことから、仁和寺に近い皆明寺に伝わった敬輔の掛け軸が、建物の寄贈に伴って小学校に移ったと考えられるのです。仁和寺と御室校の関係を今に伝える逸品です。

上京区にあった桃薗小には、幕末に制作された作品「東方朔図」（写真2）がありました。筆者の横山清暉は四条派の呉春や松村景文に学んだ有力画家です。

東方朔は中国前漢時代、武帝に仕えた政治家です。西王母の仙桃を盗んで食べ、800歳の長寿を得たという伝説があるため桃を持った姿で描かれています。本作は学区民から、「桃薗」という校名にちなんで寄贈されたものと言われています。

小学校に江戸時代の絵画があることによく皆さんは「なぜ？」と驚かれますが、それに答えるそれぞれの由来もきちんと伝わっているのです。

（京都市学校歴史博物館学芸員　森光彦）

◇

今回紹介した「虎図」と「東方朔図」は京都市学校歴史博物館（下京区）で31日まで展示しています。

写真1、高田敬輔「虎図」（1751年、御室小蔵）

写真2、横山清暉「東方朔図」（江戸後期、元桃薗小蔵）